

「踊る大捜査線 THE MOVIE 3 ヤツらを解放せよ！」

☆☆☆

2010（平成22）年6月18日鑑賞<東宝試写室>

監督：本広克行

青島俊作（湾岸署刑事課強行犯係係長警部補）／織田裕二

恩田すみれ（湾岸署刑事課盗犯係巡査部長）／深津絵里

真下正義（警視庁警視）／ユースケ・サンタマリア

室井慎次（警察庁長官官房審議官警視監）／柳葉敏郎

和久伸次郎（湾岸署刑事課強行犯係巡査部長）／伊藤淳史

篠原夏美（湾岸署刑事課強行犯係巡査部長）／内田有紀

小池茂（警視庁刑事部交渉課課長警視）／小泉孝太郎

神田署長（湾岸署署長警視正）／北村総一朗

袴田健吾（湾岸署刑事課課長警部）／小野武彦

秋山副署長（湾岸署副署長警視）／斉藤暁

魚住二郎（湾岸署警務課課長警部）／佐戸井けん太

中西修（湾岸署刑事課盗犯係係長警部補）／小林すすむ

緒方薫（湾岸署刑事課強行犯係巡査部長）／甲本雅裕

森下孝治（湾岸署刑事課盗犯係巡査部長）／遠山俊也

木島丈一郎（警視庁刑事部捜査一課特殊犯捜査係警視）／寺島進

爆発物処理班班長（警視庁警備部爆発物処理班班長警視）／松重豊

草壁中隊長（警視庁警備部特殊急襲部隊警視正）／高杉亘

鳥飼誠一（警視庁刑事部捜査一課管理補佐官警視）／小栗旬

日向真奈美／小泉今日子

2010年・日本映画・141分

配給／東宝

<3匹目、あるいは5匹目のどじょうは？>

名作とは何か？いい映画とは何か？の答えは難しい。しかし、ヒットする映画が「いい映画」だとすれば、その筆頭が『踊る大捜査線』シリーズ。第1作『踊る大捜査線 THE MOVIE』（98年）が観客動員数700万人、興行収入101億円を挙げたのに続き、第2作『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！』（03年）は観客動員数1260万人、興行収入173.5億円と2位に50億円以上の差をつけ、断トツの日本実写映画興行収入記録第1位に君臨している。本作はそれに続く待ちに待った第3作だが、ちょっと待てよ。その間に主人公のクビをすげ替えた『交渉人 真下正義』（05年）と『容疑者 室井慎次』（05年）があり、これらも興行収入42億円と興行収入38.3億円の大ヒットを飛ばしている。

私は『踊る大捜査線』シリーズそのものは観ておらず、観たのは『交渉人 真下正義』と『容疑者 室井慎次』だが、星の数は『交渉人 真下正義』が3点（『シネマルーム7』369頁参照）、『容疑者 室井慎次』が2点（『シネマルーム8』386頁参照）とかなり低い。テレビドラマの延長としての娯楽作としてならまだしも、映画としてはイマイチというのが私の印象だ。しかして、3匹目あるいは5匹目のどじょうを狙って発表された『踊る大捜査線』シリーズ『THE MOVIE 3』は？

<三大ネタは引越し、セキュリティそして健康診断>

『踊る大捜査線』シリーズの舞台は、お台場と湾岸警察署。そして、シリーズの顔は織田裕二扮する湾岸署刑事課強行犯係の刑事青島俊作だが、『THE MOVIE 2』から7年を経た今、青島は係長に昇進していた。もっとも、本作における彼の役割は、新築された新湾岸署への「引越し本部長」。そして、新湾岸署の「売り」は最新のセキュリティシステム。それは、お台場は外国からの要人が降り立つ空港が近いうえ、高速道路や発電所などのライフラインが多いため、テロリストの絶好の標的とされる危険があるためだ。もっとも、鳩山政権のノー天気な安全保障政策を見ていた限りでは、本心からそんな配慮をしていたとは思えないから、これはあくまで映画における仮定の話？他方、引越しのドタバタぶりが描かれる導入部においては、なぜか湾岸署に勤務する人たち全員の健康診断が重なっていた。そして、青島刑事にはドクターから再三電話がかかっていたが、それは一体ナゼ？

このように、『THE MOVIE 3』全編を貫く三大ネタは引越し、セキュリティそして健康診断。テレビのバラエティー番組さながらの「受け」狙いのセリフを再三登場させながら、本広克行監督がそれらをどのようにバランスよく配置しているかは、あなた自身の目でしっかりと。

<キーマンは小栗旬、しかしてキーウーマンは？>

織田裕二扮する青島刑事を中心とするオールスターで構成される本作には、ラストであつと驚く大出世を遂げる交渉人真下正義（ユースケ・サンタマリア）、今や警察庁長官官房審議官警視監に大出世した室井慎次（柳葉敏郎）も登場するが、『THE MOVIE 3』のキーマンは管理補佐官の鳥飼誠一（小栗旬）。5月26日に観た『ロストクライム－閃光－』（10年）でも「管理官」の権勢ぶりが顕著だったが、『THE MOVIE 3』でもそれは同じ。警察組織の本店たる警視庁にしてみれば、支店にすぎない所轄署は屁みたいな存在だから、事件の捜査をめぐってはいつも本店（警視庁）と支店（所轄）が縄張り争いをくり広げるわけだ。そこで必要とされるのがその調整役だが、今が旬の俳優小栗旬の管理補佐官としての調整ぶりは？

他方、本作のキーウーマンは小泉今日子。本作前半では、作業員に扮した若い連中が引越し作業にまぎれてパソコンをコピーしたり、拳銃を盗んだり、挙げ句の果ては最新のセキュリティシステムの説明書をすり替えたりと、やりたい放題やっている姿が目につくが、これって一体誰が指揮しているの？キーウーマンの登場は中盤からだが、『グーグーだって猫である』（08年）の小島麻子役など、さわやか系、癒し系の役柄が多いキョンキョンこと小泉今日子が、本作では新興宗教の教祖のような、いかにも奇妙な役で登場！本作ではそんなキーマンとキーウーマンに注目！

<好きな人はタップリと・・・>

『THE MOVIE 3』最大の仕掛けは、犯人グループが新湾岸署のセキュリティシステムを「悪用」したことによる新湾岸署の「占拠」。最新システムを採用したということは、いったんシステムが作動し署が要塞化してしまうと、もはや誰もどこからも入れなくなってしまううえ、外部からその解除が不可能になってしまうことを意味しているから、かえって始末が悪い。やはり、いくらシステムが進歩しても、それを使いこなすのは人間だし、ミスをするのも人間だという当たり前のことが本作を観ているとよくわかる。「占拠」されてしまった新湾岸署の中には午前0時にセットされた爆発物が隠されているらしいが、ケータイによる連絡などの原始的手法によってその探索と爆発阻止は可能なの？そしてまた、そんな犯行を仕掛けたのは一体誰？それが最大のポイントだ。

『THE MOVIE 3』の後半からラストにかけては、そんなポイントを青島刑事が1つ1つ解明しながら持ち前の行動力で突っ走っていくが、はっきり言ってこりゃテレビドラマのノリ。したがって、そんなノリが好きな人はタップリとその醍醐味を味わってもらいたい。しかし、テレビのバラエティー番組が大嫌いになり、予定調和的なテレビドラマも観る気がなくなっている私には、いくら大ヒットシリーズの3作目でも、やはりイマイチ・・・。

2010（平成22）年6月19日記